

■夏目漱石(金之助) 小説家。劇的な精神の遍歴の後の短い期間に、闘病しながら、次々と大傑作を発表して、早世。

なつめそうせき

大政奉還・・・1867＝ 江戸牛込馬場下横町の名主夏目小兵衛の五男に生まれた。本名は金之助。

明治維新・・・1868＝ 1歳：塩原昌之助の養子になり、幼年期を浅草界隈で送った。

初の日刊新聞1870＝ 3歳：痘瘡にかかり、鼻の頭に痘痕が残る。孤独な幼年時代の記憶は暗い色調に覆われている。

明治6年政変 1873＝ 6歳：

三つの反乱・1876＝ 9歳：養父母の離婚のため生家に戻ったが、やすらかな帰属感を抱くことはできなかった。

大久保暗殺・1878＝11歳：小学校の友人らと回覧雑誌を出し、「正成論」を書く。東京府第一中学に入学。

明治14年政変1881＝14歳：生母が死去。第一中学を中退し、二松学舎に入り漢籍を学ぶ。漢詩文の趣味と素養はこの時期に身についたが、文明開化の世に好きな漢詩文で身を立てることは諦め、

岩倉具視没・1883＝16歳：成立学舎に入って英語を学び、

秩父事件・・・1884＝17歳：大学予備門に入学。

内閣発足・・・1885＝18歳：一度落第して原級に留まるが、心機一転、卒業まで首席を続ける。

初の対等条約1888＝21歳：学制改革により予備門が改称された第一高等中学本科に進むにあたり、国家有用の事業としての英語の文学を生涯の仕事としよう英文学を専攻するが、"洋文学の隊長"たらんとの当初の野心は、まもなく"英文学に欺かれたかの如き"失望に変わる。

帝国憲法発布1889＝22歳：

帝国議会始・1890＝23歳：東京帝大英文科に進み、文部省貸費生となり、「方丈記」を英訳したりする。正岡子規を識る。

郡司千島探検1893＝26歳：卒業して高等師範学校に就任するが、英文学への懷疑は後もつの一方で、自分の生存理由を疑う人生的懷疑へ深まり、何ものかに追跡されている迫害妄想を抱くにいたり、

日清戦争始・1894＝27歳：鎌倉円覚寺で参禅ののち、

日清戦争終・1895＝28歳：職を辞し、子規の縁で松山中学の英語教師として都落ちするという、不可解な行動に出る。

白馬会・・・1896＝29歳：

八幡製鉄始・1897＝30歳：父が死去。

子規句歌革新1898＝31歳：妻ヒステリーに悩まされ、白川に投身をはかったりする。

Bushidou・・・1899＝32歳：長女誕生。以後、次々と2男5女が生れる。

ビブ/国産化・1900＝33歳：文部省の命によりイギリスへ留学。在学以来苦しんだ英文学への懷疑を根底より解決しようとし、下宿にこもり食費を節約して書物を買込み、猛勉強を始めたが、激しい神経衰弱に陥り、文部省の報告書を白紙のまま本国へ送り、そのため漱石発狂のうわさが飛ぶ。漱石が突き当たったのは彼我の文学の言葉の違い、それも感性に訴える面での"taste"の違いに由来する了解不可能という壁であった。この宿命的な壁を除くことはできないが、論理化することによって日本人として英文学に対する主体的態度を確立しようとし、歴史、心理学、社会学、文明論にわたる読書と思索を続けた。それは英文学の範囲を超えた文学の原理的考察であり、東西文明の根底的な比較であった。

日比谷公園・1903＝36歳：帰国した漱石は、東京帝大英文科講師として"英文学概説"の講義を、ロンドンでの悪戦苦闘の思索をもとにおこなった(「文学論」)が、学生には難解で不評で、神経衰弱は帰国後も続き、しばしば幻聴に悩み、被害妄想による癡癪の破裂となり、一時妻子と別居するにいたる。

日露戦争終・1905＝38歳：*このときの苦しみを、雑誌{ホトトギス}に高浜虚子のすすめで発表した「吾輩は猫である」に滑稽と諧謔を交えて描き、予想外の反響を呼び、一躍文名があがる。並行して「倫敦塔」「蕪露行」を書き、

満鉄発足・・・1906＝39歳：*「坊っちゃん」「草枕」を発表、せきを切ったような旺盛な創作意欲で、大学教師との両立は困難になる一方、小宮豊隆、森田草平、鈴木三重吉ら教え子を中心とする弟子たちが家に入り入りするようになり、面会日にちなむ{木曜会}が発足、のち、芥川竜之介、久米正雄、松岡譲らが加わる。

韓国反日暴動1907＝40歳：教職を辞めて東京朝日新聞社に入社し、職業作家になる。入社第1作「虞美人草」、

アヲキ`創刊・ 1908＝41歳：つづく「三四郎」、

伊藤博文暗殺1909＝42歳：「それから」で、文明批評とからませた人間の存在追求に深さを増し、

韓国併合・・・1910＝43歳：「門」にいたって、澄んだ静謐な形而上的感触を暗示する作風を示すが、宿病の胃潰瘍から転地療養先で大吐血をし、生死の境を彷徨し、この体験のすぐれた結晶「思ひ出す事など」を発表。文部省から文学博士号授与の通知を受けるが、辞退。胃潰瘍再発、重ねて痔を病み、再び闘病生活に入る。朝日文芸欄が廃止。

明治天皇没・1912＝45歳：「彼岸過迄」、

大正政変・・・1913＝46歳：「行人」。強度の神経衰弱再発、胃潰瘍の再発などで病臥。水彩画に凝る。

第一次大戦始1914＝47歳：*「こゝろ」で人間の孤独と"我執"を追求する深刻な作風を示した。

21ヶ条要求・1915＝48歳：自伝的小説「道草」で過去の自己を祖上に、その意味を問う。京都旅行中胃潰瘍で倒れる。

民本主義・・・1916＝49歳：*「明暗」で作家的技量を駆使した最大の長編を書きすめたが、胃潰瘍の発作のため未完のまま、没した。